

## 第13回日米先端科学シンポジウム (JAFoS) 実施報告書

Planning Group Member 日本側主査

大阪大学 産業科学研究所 教授 永井健治

2012年11月29日午前、久しぶりにロスアンジェルス国際空港に降り立った。空港出口ではNASのDanielleさんが出迎えて下さり、ここで日本側参加者のほとんどの人たちと落ち合うことになっていた。私が搭乗したANA機はほぼ定刻通りに到着したが、JAL機は大幅に遅延とのこと。おまけに天気は今にも雨が降り出しそうな曇天であった。なんだか幸先が悪い。果たして本シンポジウムは成功するのか？そのような一抹の不安を抱きつつ、NASがチャーターしたバスに乗り込み、アーバインに向かった。

1時間ほどして宿泊先のハイアット リージェンシー ニューポート ビーチに到着した。前回ここに来た時は「Optical Measurement and Control of Neuronal Activity」というトピックのスピーカーであった。もう4年も前である。あの時はまさか自分が日本側の代表として再びこの地を訪れるとは夢想だにしなかった。それにしても2008年の第11回JAFoSが懐かしい。あの時は質疑応答や議論で日本側が米国側を圧倒している場面が多く、言葉の壁を越えて日本人も結構やるなど感心した。果たして今回もあの時のように行くのだろうか？相変わらず日本側代表としての不安は払拭されなかった。

前夜祭に先立って、夕方5時からは各セッションのPGMとチェアが集まって、事前打ち合わせが行われた。と言っても既に9月26日に東京にて事前検討会を行い、その後どうやったら分かりやすくかつインパクトのあるプレゼンができるかを私の方から各スピーカーにメールで送っていたので、改めて発表の仕方云々を話し合うことは無かった。それよりも、質疑の時のマイク回しをどうすべきかについて時間を割いた。これまでは、米国開催の時にはスタンドマイクを設け、質問したい参加者が列を作って並ぶ方式を取っていたのに対し、日本開催の時にはマイク係りがチェアの指示に従って、挙手した質問者にマイクを持っていくという方式を取っていた。しかしながら、今回はNAS側が日本開催時の方法と同じようにやりたいと打診してきたのである。2008年の第11回JAFoS（米国開催）では日本側が米国側よりも積極的だったのに対し、2010年の第12回JAFoS（日本開催）は逆に米国側の勢いに圧倒されたのを目の当たりにしていたので、私としてはスタンドマイクを設けて質問者が列を作って並ぶ方式で行きたいと日本側参加者に打診した。

さて、いよいよ前夜祭である。まさに水入らずで、ワインをがぶがぶ飲みながら旧交を温めた。酔いが少々回ってきたところで、米国側の代表であるHeatherさんとNASのPatteさんにマイク回しについての私の意見を伝えた。すると「会場のベックマンセンターは（映画館のように）椅子が並んでいて前後の間隔が非常に狭く、真ん中に座っている人が通路に出ていくのは大変なので、スタンドマイク形式は現実的ではない」との反撃を喰らってしまった。確かにその通りかもしれないが、明日改めて椅子と椅子の間隔を確認してから結論を出しましょうということになった。

翌朝、セッションの開始直前にHeatherさん、Patteさんと会場を確認すると、やはり彼らの言う通りであった。結局、PGMに自身が担当したセッションのマイク係となってもらい、チェアの指示に従って、挙手した質問者にマイクを持っていく方式を取り入れることにした。まさに「万事休す」である。

さて、いよいよ第13回JAFoSの幕が切って落とされた。Patteさん（NAS）、浅島 誠 理事（JSPS）、米国側PGM主査のHeatherさんのウェルカムスピーチに続き、私の番である。私は2008年のノーベル化学賞受賞者3名（Osamu Shimomura, Roger Tsien, Martin Chalfie）が一堂に会している学会集合写真を披露した。そこで「ノーベル賞を受賞するくらいに良い科学を行うための重要なポイントは何でしょう？特に米国側の研究者に聞きたい。」と問いかけ、「それは“謙虚さ(Modesty)”です」と答えた。その写真には3名の偉大な研究者が30名ほどのグループの隅で慎ましく写っていたからである。間髪入れず、「日本人研究者に見習ってもらいたいことがあります」「それは図々しさです。」と言いつつ、そのグループの真ん中に腰を下ろしてふてぶてしく写っている私をレーザーポインターで指し示すと、一斉に会場から笑いが起こった。

各セッションでは、チェアからトピックに関するイントロダクションの後、二人のトピックススピーカーから発表があり、その後参加者全員によるおよそ1時間の質疑応答が行われる。第13回JAFoSのトピックは、以下のような8課題であった。

- Auction Theory and Mechanism Design
- Aftermath of Disasters
- Ocean Acidification / N<sub>2</sub>O
- Potential Replacements for Rare Earths

- Personalized Medicine
- Epigenetics: Was Lamarck Right?
- Artificial Cells and Tissues by Chemistry
- Second Law of Thermodynamics

さて、いざセッションが始まり質疑応答の時間になると、私の不安は完全に払拭されてしまった。日本側も米国側も分け隔てなく活発に質疑応答がなされるのではないか。もしかしたら、私のウェルカムスピーチが功を奏して、米国側は謙虚に、日本側は図々しくなり、それで均衡が取れるようになったのかもしれないと思った。しかし、それは単なる慢心で、実のところは、科学者としての本能がフルに発揮されれば、国がどうの、言葉がどうのというのはなくなるのだと実感した。そして、マイク回しの方法で質疑応答の質が変わると思い込んでいた自分を恥じた。と同時に、安堵感からか緊張の糸がプツリと切れてしまった。

その為かどうかは分からないが、翌日は朝から全身倦怠感に襲われ、座っているのもままならない状態になってしまった。どうやら風邪をひいてしまったらしい。残念ながらまともに議論に加われなかったが、そんな私を余所に2日目以降もがっぷり四つの活発な議論が展開された。さすが、次世代を担う研究者が集うJAFoSならではの濃い時間であった。しかし、問題点がなかったわけではない。例えば、チェアのイントロダクションが分野全体を見渡すことなく、かつ、その後の二つの発表を有機的に位置付けるという形になっていなかったものがあった。また、多くの参加者に分かりやすい内容を心がけた分、科学的な面についての突っ込んだ部分（つまりマニアックな部分）が抜け落ちていたと思われるセッションもあった。一方で、マニアック過ぎて、その分野の研究者しか議論に参加していないセッションも見受けられた。議論が真正面からぶつかるようなマニアックな構成で、かつ異分野の研究者も議論に参加できるようなセッションはできないものだろうか？次回のJAFoSのPGMへの申し送り事項としたい。このような問題点が垣間見えたものの、日米間で互角の議論が繰り広げられたという意味において、本シンポジウムは大成功裏に終わったと言えよう。帰国の途につくころには、私の心はすっかり晴れ渡っていた。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、折に触れて適切なお助言を頂いたアドバイザーボードの小安先生、有村先生、久保先生、また、2年間私を支えて下さったPGMの浦野先生、横山先生、多辺先生、牧野先生、細谷先生、加藤先生、川口先生、そしてJSPSの宅間様、大萱様、木谷様に心より感謝致したい。



Discussion の様子



Session の様子

Poster Session の様子



永井主査

Lewandowski 主査

日米 PGM への記念品贈呈



集合写真